

## 児童からみた「子ども 110 番の家」の有用性に関する考察

大同大学大学院 学生員 寺田 久人  
 大同大学工学部 正会員 嶋田 喜昭  
 大同大学工学部 正会員 舟渡 悦夫

### 1. はじめに

都市化現象や住民同士の連帯意識の低下により、地域の犯罪抑止機能が弱体化している。こうした状況の中、子どもを犯罪から守る活動として「子ども 110 番活動」が実施されてきた。主なものとしては、表-1 に示すように住宅・店舗、タクシー、駅などを活用したものがあがるが、これまで「子ども 110 番活動」の有用性等に関してはあまり評価されてこなかった。

そこで本研究は、特に「子ども 110 番の家」に着目し、名古屋市内の小学校児童を対象とした意識調査・分析を行い、「子ども 110 番の家」の有用性や今後のあり方について考察することを目的としている。

### 2. 「子ども 110 番の家」の意識調査・分析

#### (1) 調査概要

調査は本学近くの名古屋市立柴田小学校、また同区内でも防犯活動の活発な名古屋市立豊田小学校における 5・6 年生の児童を対象にした。調査対象小学校学区を図-1 に示す。2009 年 11 月～12 月に留置法によりアンケートを実施し、計 246 票の有効票を得た。

#### (2) 集計結果

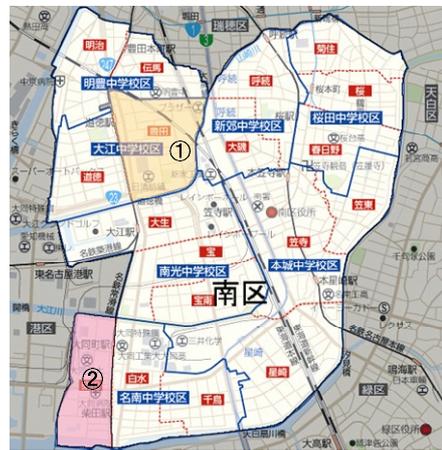
アンケートの単純集計結果について表-2 に示す。回答者数は、柴田小学校と豊田小学校で 3:7 と偏りがあるが、性別や学年の偏りはないものとなっている。

「子ども 110 番の家」の認知については、99%の児童から認知しているという回答を得たが、その役割については「少し知っている」が最も多く、約 7 割を占めている。「かなり知っている」と併せると、96%が「知っている」という回答となっており、ほとんどの児童は「子ども 110 番の家」がどういうものかをある程度知っていることがわかる。

また、「子ども 110 番の家」の必要意識については、約 8 割が「必要」という回答であり、必要意識も高いといえる。

表-1 主な子ども 110 番活動

子ども110番の家	岐阜県可児市今渡北小学校PTAが中心となり、1996年から開始した活動で、子どもが不安に感じて駆け込んできた時、保護し警察等へ連絡する活動
子ども110番 タクシー	小・中・高等学校の登下校の時間帯に合わせて、空車の車両が、子どもたちを見守るようにしている活動
子ども110番の駅	不審者から逃れるために逃げ込んできた子どもの安全を確保し、安全な地域づくりに貢献する活動



- ①豊田小学校学区  
 児童数:584人  
 学区人口:8920人  
 面積:1.189km<sup>2</sup>  
 人口密度:7502人/km<sup>2</sup>  
 子ども110番の家の数:約240件  
 (学区独自の子ども110番の家を含む)
- ②柴田小学校学区  
 児童数:208人  
 学区人口:5557人  
 面積:1.020km<sup>2</sup>  
 人口密度:5448人/km<sup>2</sup>  
 子ども110番の家の数:17件

資料：名古屋市地域学区ガイドより

図-1 調査対象小学校学区

表-2 集計結果

項目	カテゴリ	票数	比率	項目	カテゴリ	票数	比率	
属性	学校	男子	119	48%	「子ども110番の家」の利用経験	利用したことがある	17	7%
		女子	127	52%		利用していない	222	93%
	学年	5年生	120	49%	「子ども110番の家」の認知数	0件	10	4%
		6年生	126	51%		1件	20	8%
	性別	柴田小学校	74	30%		2~3件	104	43%
		豊田小学校	172	70%		4件以上	108	45%
帰宅時人数	1人	29	12%	「子ども110番の家」サインの改善要望(MA)	このままでよい	112	46%	
	2人	65	26%		サイズを大きくしたほうがよい	61	25%	
	3人	109	45%		目立つ色に変えたほうがよい	88	36%	
	4人以上	43	17%		デザインを変えたほうがよい	46	19%	
	その他	7	3%		その他	7	3%	
帰宅所要時間	5分未満	57	23%	「子ども110番の家」の必要意識	必要である	191	80%	
	5分以上~10分未満	95	39%		必要でない	4	2%	
	10分以上~15分未満	55	23%		わからない	42	18%	
	15分以上~20分未満	32	13%		持っていない	125	52%	
	20分以上	5	2%		いる場所がわかる携帯電話	11	5%	
「子ども110番の家」の認知	認知している	244	99%	防犯グッズの所持(MA)	防犯ブザーのついた携帯電話	19	8%	
	認知していない	2	1%		普通の携帯電話	40	17%	
「子ども110番の家」の役割の認知度	かなり知っている	72	30%	防犯ブザー	64	27%		
	少し知っている	161	66%	その他	16	7%		
	すこし知っている	161	66%					
	知らない	9	4%					
「子ども110番の家」の認知方法(MA)	説明は受けていない	19	8%					
	学校の先生	188	77%					
	親	89	37%					
	広告やポスター	36	15%					
	その他	18	7%					

キーワード 意識調査, 子ども 110 番の家

連絡先 〒457-8532 名古屋市南区白水町 40 大同大学 工学部 都市環境デザイン学科 TEL052-612-5571

「子ども 110 番の家」の利用実態としては、7% (17 人) の児童が「利用経験があり」と答えているが、このうち事件や事故にあいそうになり助けを求めた児童は 2 人となっている。

「子ども 110 番の家」の看板等のサインの改善要望に関しては、約半数が「このままでよい」という回答になっているものの、「サイズを大きくする」や「目立つ色に変えた方がよい」という指摘も多いことに留意する必要があるといえる。

(3) 有意差検定

「子ども 110 番の家」の認知状況や利用経験、必要意識と、回答者属性等との関連性をみるために有意差検定を行った。図-2 に示すように、学校別にみた「子ども 110 番の家の認知数」には有意差 (1%) がみられる。豊田小学校では「子ども 110 番の家」を複数知っている児童がほとんどだが、柴田小学校では 0 件や 1 件しか知らないという児童も多い。

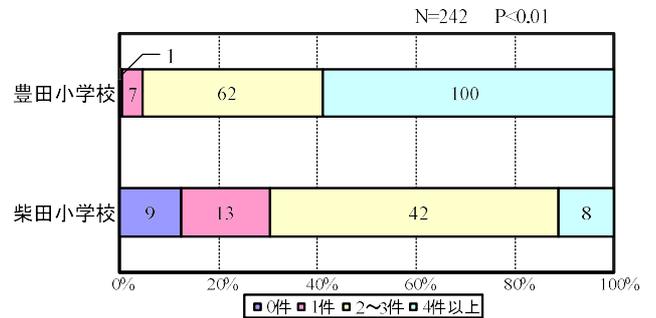


図-2 学校別の「子ども 110 番の家」の認知数

(4) Decision Tree 分析

「子ども 110 番の家」の役割の認知度に及ぼす要因を探るために Decision Tree 分析 (CRT) を行った。ここでは目的変数として、「子ども 110 番の家」の役割を「かなり知っている」、あるいは「少し知っている」という 2 段階の認知度を用いた。説明変数としては、学校・学年・性別、帰宅時人数、帰宅所要時間、「子ども 110 番の家」の認知方法、所持している防犯グッズの種類を用いた。このとき認知方法は、「説明を受けていない」「教員」「親」「教員と親」「その他」とし、防犯グッズの所持は、「持っていない」「携帯電話」「防犯ブザー」「携帯電話と防犯ブザー」にそれぞれ分類している。分析結果を図-3 に示す。まず、役割の認知度は帰宅時人数が 5 人を境にセグメント化され、5 人以上で帰宅する児童は、5 人未満で帰宅する児童に比べ認知度が高くなっている。また 5 人未満で帰宅する児童の中でも教員と親など複数から説明を受けている児童は、説明を受けていない、または教員、親のどちらか一方の説明しかを受けていない児童に比べ認知度が高くなっている。さらに複数から説明を受けている児童の中でも帰宅所要時間が 15 分以上の児童は 15 分未満の児童に比べ認知度が高くなっている。これらより集団で 15 分以上かけて帰宅し、教員と親など複数から説明を受けている児童は相対的に「子ども 110 番の家」の役割の認知度が高くなっていることがわかる。

3. まとめ

本研究では、名古屋市内の小学校児童を対象に「子ども 110 番の家」に関する意識調査分析を行った。得られた主な成果・知見は以下のとおりである。

「子ども 110 番の家」の認知度や必要意識は総じて高く、「子ども 110 番の家」の存在価値がある程度確認できた。しかし、サインの改善など留意すべき点もある。また、「子ども 110 番の家」の認知数は学校によって差があることや、認知方法などで「子ども 110 番の家」の役割の認知度に差が生じることを踏まえると、学校や家庭における防犯教育は児童の防犯意識の向上に寄与し、重要であるといえる。

今後の課題として、さらに詳細に「子ども 110 番の家」の犯罪抑止効果等を検討する必要があるといえる。

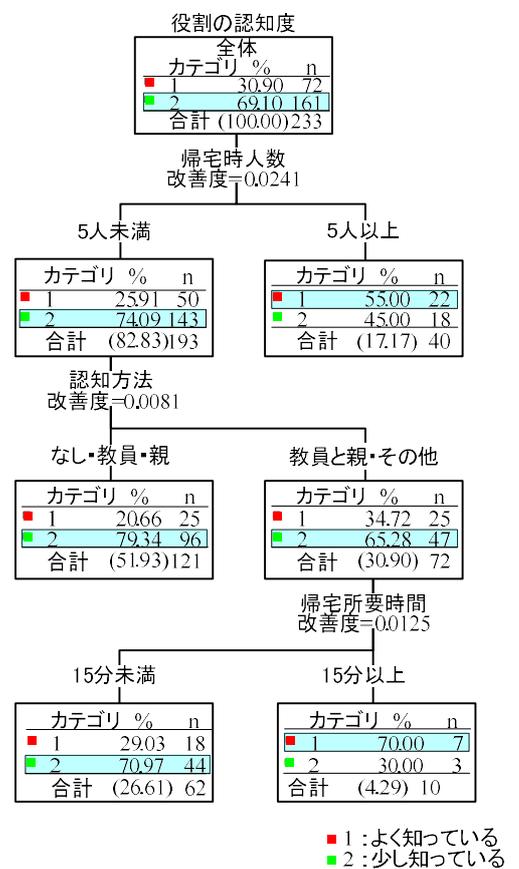


図-3 役割の認知度に及ぼす要因分析結果